

ボランティア・ワークキャンプを通して経験した 学生の成長プロセスについて

磯田 浩司／仲山 友

要旨

本稿では、NPO法人グッド（以下グッドと表記）の活動に参加する大学生を対象とし、内面の変化に焦点を当て、その成長プロセスを明らかにする。特に参加者の「ものの見方・考え方」の変化に着目し、かつ、1回のワークキャンプ経験のみならず、その後のさまざまな活動の経験も視野に入れ、参加者に起こった意識変容・行動変容を、定性的に明らかにする。（なお、本文中「筆者」とは磯田を指す）。

1. はじめに 前回実践報告に対する本稿の位置付け

筆者らは、ライフストーリーの手法を用いて、NPO法人グッドのプログラム参加者の変容・成長について分析を行ってきた（磯田・仲山2022）。本稿では、同様の観点から、一人の大学生を取り上げ、その変化に着目して実践報告する。先の実践報告では不登校経験のある学生の変容のケースを検討した（同書）。しかしながら、グッドにおけるユースワーク¹の対象となるのはそのような顕在化した問題を抱える者ばかりではない。大学生年次の青年は高等学校までとは異なる生活に悩みを抱えていたり、多様な人々との出会いを通して価値観が変わっていったりと、人間的成長を経験するための非常に重要な時期を過ごしている。しかし、そうした大学生年次の若者（青年層）に対するユースワークは、我が国においてかなり限定的であり、「大人が関わって育てる」という環境は非常に少ない。育てる対象として関わられることで、本人も予想していなかったほどに成長するこの貴重な時期の若者たちが放置され続けていることは、大変な機会損失である。

青年期の若者に対するユニークなユースワークの事例としてグッドの参加者を取り上げ、ワークキャンプ（以下キャンプと表記）という「きっかけ」を通してその意識が変化していく過程を明らかにし、潜在的な成長可能性を示すことで、NPO職員・学校関係者・教育関係者ら青年期の若者層に関わる人々の一助となれば幸いである。

また本稿はキャンプ参加者の変容の平均像を明らかにすることを目的とせず、インタビュー動画²と本人が記述した作文³を元にそのライフストーリーに沿って分析する。そ

¹ 磯田・仲山2022でも述べたように、ユースワークとは「主に思春期以降の若者に関わる活動や事業の総称」であり、イギリスでは1970年代以降「若者のために提供するサービスという『上から目線』ではなく、若者に関わり支援する」活動であると定義される。（田中2015:2）

れによって定量的データでは明らかにならない、意識変容のプロセスを詳らかにし、当時のスタッフの指導・関与について考察しながら、参加者の意識転換について報告したい。

2. グッドとは

2-1. グッドにおけるユースワーク

調査対象とする団体はNPO法人グッドである。グッドは「不登校・引きこもり経験者を含む全ての若者」を対象として、国内外でボランティア・ワークキャンプを実施している⁴。

グッドの参加者は大きく3つの層に分けることができる。すなわち、「1.不登校・引きこもりといった、大きな問題を抱えている若者」「2.なんとか学生生活は送れているものの、対人関係に対する強い苦手意識などの問題を抱えている若者（磯田・仲山2022におけるAの事例はこれにあたる）」そして「3.問題なく、元気に学生生活を送っているように見える若者」である。3.の学生たちに対しては、「人間関係においてここが改善されると、さらにリーダーシップを発揮できるようになる」とか、「本人は無自覚だが、周囲の求める役割を演じているために肩に力が入っている」といったポイントにアプローチをする。「そのままでもやり過ぎせなくはないが、そこが改善されると本人・周囲双方にとってプラス的作用をもたらす」ような部分に、「お節介に」関わっていく。1.や2.のような顕在化した問題に対するアプローチだけでなく、予防的な側面の強いユースワークも行っていると言える。

2-2. 成長の契機としてのワークキャンプと継続的ユースワークの仕組み

筆者らは、ユースワークを有効に行う際、一度のワークキャンプ参加のみでは十分ではなく、その後のあり方が重要であることを指摘した（同書）。同団体の主幹事業であるワークキャンプは、参加者にとって、非日常の中で異質な他者と出会う体験であり、大きな成長への契機となる。しかし、日常の学生生活に戻ってから、非日常での学びを忘れずにさらに成長したり、人と関わり続けたりすることは容易ではない。そこでグッドでは、事務所内にフリースペースを設け、スタッフや参加者同士が有機的につながる環境づくりを行っており、また、学生インターン制度⁵が用意されている。

さらに、グッドにおけるユースワークにおいて重要な役割を果たすのが、スタッフの存

2 インタビューはグッドの事務所において、対象者が大学4年生であった2021年8月に実施した。内容は調査対象者の許可を取った上で映像及び音声として記録している。インタビューの際には、共通の経験を持つ親しい関係性の中で行われる証言を重視し、対象者と年代代である学生参加者を聞き手とし、経験談の深掘りを行った。また対象者と共に活動したスタッフ、および他の参加者の証言も参考としている。

3 キャンプ参加時に課題として全員に提出が求められる「事前作文」「事後作文」である。事前作文は「最近の私」、事後作文は「●●キャンプに参加して」という表題で書かれ、前者にはキャンプへの参加動機や関心事、悩み、目標などが綴られることが多く、後者にはキャンプでの出来事、成長実感等を振り返る内容が自由記述される。

4 詳細については先の実践報告（磯田・仲山2022）およびホームページを参考にされたい。

5 「学生インターン制度」とは企業での就業体験とは異なり、参加する学生が成長することを目的とした取り組みである。団体への貢献を期待している部分もあるが、変容の可能性や必要性がある者が、より自然な形で関わり続けられる仕組みという側面が強い。

在である。彼らには不登校・引きこもり経験者を含む幅広い若者に関わるプロであることが求められる。日夜変化する若者の状況を丁寧に理解し、どのような経験や言葉が必要かを考え、挑戦の機会を与える。言いづらいことも本人のためであると思えばはっきりと伝える。遊びを大切に、楽しさを共有する。地道で覚悟を持ったスタッフからの参加者への関わりが、グッドという独特な空間を成り立たせている。

3. 実践報告

3-1. 概要

本実践報告では大学1年次から現在に至るまでグッドのプログラムに参加しているN(女性)を対象とする。大学生時代に約3年間活動に関わる中で、性格・行動面での大きな変化が見られた元学生である。

3-2. Nのプロフィール

1999年埼玉県出身。女性。2018年東京都内の私立大学に入学。教職課程を履修しており、大学教授の紹介でグッドのプログラムを知り、2019年2月にスリランカワークキャンプに初参加した。現在は都内で会社員として勤務している。調査対象者の選定理由は、約3年間の経験を通して、ものの見方や価値観の変化と性格・行動面での大きな変容が見られたため。Nは大学1年次より、在学中に17回のワークキャンプ及びきっかけ+仲間づくりキャンプ⁶（以下、きっかけキャンプと表記）に参加した。また、2019年3月より学生インターンとなり、グッドの事務所に週に1度通いながら、日常のワークの手伝いやイベントの企画といった活動を継続的に行っていた。

3-3. 継続的ユースワークによる参加者の変容

3-3-1. 初回参加までの対象者の性格・人物像

まずは、ワークキャンプに出会うまでの彼女がどのような性格であったのかを紹介したい。本人記述の作文（2019年に参加した静岡キャンプ事前作文、2019年に提出した学生インターン志望理由書）において以下のように言及している。

私は自分から誰かに声をかけるタイプではないし、初対面の人と話すのはとても緊張するし話しかけるのに勇気がいる。何度もあったことがある人でも相手がどう思うか、自分がどんなふうにもられるかを気にしてしまい、本当に言いたいことを言えないことが多い。大学に入ってからには特に悩むようになった。一緒にご飯を食べたり、授業を受ける人はいるけれど、一緒にいて疲れる、苦しい、何を話していいのかわからないと思うことが多くなった。大学には自分が心を許せる居場所は作れないのかもしれないと思い始めていた。（静岡キャンプ事前作文）

⁶ 新型コロナウイルスの流行を受けワークキャンプ開催が困難となったため実施していた、ボランティア活動を伴わない宿泊プログラム。グッドのワークキャンプの手法を取り入れながら、参加者同士が相互交流・自己理解を深める場を提供した。

人前に立って話すことも嫌いだだったので、授業で手を挙げたことはほとんどないし、委員会や係の仕事などにも積極的に参加してこなかった。(学生インターン志望理由書)

幼少期よりNは大変物静かで人見知りな性格であった。加えて、部活動で自分だけが上達しなかったことから、自信を失い、引込み思案になった。初めてグッドの事務所を訪れた際も、スタッフの声掛けに対して反応が少なく、自分が何を感じているか、どう考えているかをほとんど表情に出さなかった。本人は無自覚に行っていることであったが、部活やクラスといった規定された人間関係がなくなり、自主性に任せられた人間関係を構築する大学生年次になった際に、親密な関係を築くことができず、周囲に合わせることに「疲れ」「悩んで」しまう状況に陥っていた。

3-3-2. 初回キャンプでの経験（純粋な人間関係の獲得）

授業の講演でグッドのワークキャンプを知ったNは、大学1年次、2019年春にスリランカキャンプに初参加した。全国から集まった同年代の参加者26名及び筆者含むスタッフ3名とともに、地域の集会所づくりを行なった。事後作文にて、次のように記述している。

1つ目は、村でのホームステイだ。村で過ごした10日間は毎日が新しいことの発見で刺激的だった。圧倒的な自然に囲まれ、日本では珍しい動物に驚き、村人がくれる果物を食べ、一緒にティー（お茶）を飲んで、ご飯を手で食べ、子どもたちと走り回った。あんなに心配していたシンハラ語は何とかなっていた。(中略)言葉が伝わらなくて何とかなるって分かって、なんだか笑えてきた。今までは言葉が通じる人に対して言葉を気にしたり、何を話すか考えたりして生活していたのに、村での10日間は全く違った。気を使うものも縛られるものもなく、取り繕っていない自然な自分であることができ、楽だった。(中略)大好きなアーチ（おばあさん）の隣で、おいしいティーを飲みながら、その日一日の出来事を思い出して、思い出し笑いしながら日記を書く。すごく幸せな気持ちで満たされていた。(中略)村の生活をする中で、自分が今後大切にしたいと思ったものを日本でも大切にしていきたい。

2つ目は、人と話すことの難しさと大切さを知ったことだ。(中略)みんなは私にいろいろな言葉をかけてくれて、ポジティブになれる力をくれて、自信をつけてくれた。自分のことを話すうちにみんなのことをより安心できる人たちだっと思うようになった。でも、日本に帰ってきて日記を読み返したりキャンプを振り返ったりする中で、自分はみんなにそれができていたのか考えるようになった。(中略)4年生たちにはすごく話しやすかったし、たくさんのことを教えてもらった。すごくかっこいいし、尊敬できる人たちだった。自分はあと3年間であの先輩たちみたいに人を安心させられるような存在になれるか分からないけれど、あんな人たちみたいになりたいと思う。大学1年の春に目標にしたい人たちに出会うことができよかった。これからどんな3年間で過ごすのか、楽しみになってきた。

作文において、Nは2点の意識転換に言及している。1点目はホームステイ経験による自信の獲得と幸福の実感である。Nは未知の土地で何事においても自分が適応できること

を実感して自信を得た。そして日常生活の窮屈さや悩みから解放され、利害関係のない「純粹な人間関係」を獲得し、日常生活・学生生活では感じられない大きな愛情を受け、幸福を感じた。そしてそれを日常生活である日本でも続けていきたいという目標ができたことが重要な変化であるといえる。

2点目は、人と話すことの大切さを知ったことである。これは主に同年代の日本人参加者との関係が影響した変容といえよう。自信がなく、事前のアンケートでは自身の好きな面について書くことができなかつたNは、キャンプ中目立たず、声もととても小さかつた。しかし、周囲からのポジティブなフィードバックを受けて自信を獲得していく様子が伺える。特に対人面での変化はNにとって大きな価値観の変容をもたらしたと考えられる。学生生活を通して「出る杭にならず、問題を起こさず、自分の存在を消していることでバランスを取る」ことに慣れていてNは、普段自分が関わらないような人と話をする事で「人と話すことの面白さ」を感じ、それまでの自分の在り方は自分の感覚を鈍くしていたこと、そして本当は人と話すことが好きだったことを知る。同時に、話すことに慣れていないことを自覚し始め、課題に気づく契機となつた。

キャンプ中、Nの様子を観察する中で彼女の自信のなさや、そのために感情表現や声の大きさが控えめであることに気づいたスタッフは「あなたにもいいところがたくさんある、自信を持って」と伝える。Nは涙を流して頷いていた。非日常の中で、肩の力を抜いて話をする事、日々の人間関係から離れて自己開示をすること、そして利害関係のない人々から温かい言葉をかけてもらう経験は、本人にとって「自分と向き合う」ことにつながる。Nにとっては、「何もできない」とネガティブになり、消極的になる自分に気づき、無自覚であった苦しさが露呈した。しかし同時に、理由のわからなかつた窮屈さから解放され、他者からの声掛けにより、自信をつけることにもつながつた。

3-3-3. インターン活動への参加（目標設定と継続的な関わり）

初めてのワークキャンプを終え、自身の変化を感じたNは、事務所への来訪・他のキャンプへの参加を通して、継続的にプログラムに参加するようになった。2019年に提出したインターン志望理由書では、N自身がなりたい人物像やこの先の目標について語られている。

グッドの学生インターンを通して、人との関わり方や人前に立って堂々と話す力を学びたいと思う。(中略) いろんな人の話を聞いて、自分とは違う考え方にたくさん触れることができ、面白いと感じた。スリランカで出会った人たちとのつながりを大切にしていきたいと思ったし、それと同時にもっとたくさんの人と関わってみたいと思うようになった。スリランカだけでなく、ほかの場所でも同じように関わられる力を身に付けたいと思った。／キャンプ中に、スタッフさんから「Nのいいところは周りの人たちを安心させられるところだよ」と言ってもらった。自分は周りの人を安心させられる力があるとは思っていなかったの、言われたときはピンとこなかつた。人を安心させるってどんなことだろうって考えてみると、キャンプ中のH(先輩インターン)の事を思い出した。一人一人の事を見て声をかけてくれたり、出し物の練習でみんなをまとめてくれたり、困ったことがあったら話を聞いてくれた。どうしてかは分からないけれど、Hと話していると安心

できたし、心強かった。不安なことは話してみようっていう気持ちになった。人を安心させるってこういうことかなって思った。私にそんな力があるなら、もっと磨いてみたいと思った。人前に立ってみんなをまとめられるようになりたいと思ったし、上辺じゃなくて人の気持ちを真剣に考えられる、人のために一生懸命になれる人にあこがれた。

非日常の中で楽しかった分、帰国後への不安を感じていたNであったが、帰国後もその楽しさは新たな広がりを持つことになる。グッドの事務所には「フリースペース」と呼ばれる機能があり、歴代のキャンプの参加者が交流できる場となっている。ここがNにとって新たな居場所となり、毎週1回、通うようになる。人間関係が固定化され、自身のキャラクターが規定されている既存のコミュニティと異なり、利害関係のない中で相手と関わることができる環境は、Nにとって新鮮で、純粋に楽しい場所であった。ワークキャンプ自体は短期間のプログラムではあるが、参加者およびスタッフとの人間関係が継続されること、集える場があること、そして同じキャンプに参加しておらずとも、グッドのキャンプに参加したという共通項を持つ者同士で新たな人間関係の広がりができることが、グッドという場の大きな特徴であり、ユースワークの効果を高めている要とも言える。

また、Nはインターンになるにあたり、先輩インターンのHの名前を挙げている。自分が「してもらったこと」を思い出し、「憧れの存在」として意識している。2015年から始まった学生インターン制度や、卒業した社会人と交流する機会は、「あんなふうになりたい」という少し先の目標に間近に接することができる良い環境を生み出している。

3-3-4. 2回目のキャンプ（挑戦と失敗経験からの学び）

Nは次なる目標を持ち、スリランカキャンプからわずか1ヶ月後に静岡におけるワークキャンプに参加した。インタビューと、2019年に参加した静岡キャンプ事後作文にて次のように回顧している。

N：少人数でいるときは自分が出せるなって思ってたけど、人前に立つとそれが出来ない。人前で何かやるのを頑張ってみようって思って行った。(先輩インターンの)Sがモーニングエクササイズやろうって声かけてくれた。M(スタッフ)には「出しきれてない」って言われた。場をもらったのに頑張り切れない、出し切りたいのに出し切れないなみたいなのがっかりだった。

Y：(中略)悔しかった気持ちも結構あったキャンプだった？

N：そうだね、「出し切りたいって思ってるけどさ！」みたいな。ぐずぐずしてた。

Y：「できない、どうしょ」って誰かに相談したの？人からツッコまれて気づいたの？

N：自分的に手ごたえがあんまり無かったから、M(スタッフ)に聞いた。なんとなく想定していた答え「全力じゃなかった。出し惜しみしたよね」って返ってきて。せっかく声かけてくれたけど、任せちゃったなどかの感覚はあった。(インタビュー)

2回目のキャンプである今回の目標は、挑戦すること。人前に出ることが昔から苦手だったけれど、頑張ってみたいと思うようになり、そんな時にこのキャンプの参加が決まった。初参加のスリランカキャンプの時の自分よりも、成長できた!と実感できる時間を過ごし

たかった。でもそれはすごく難しいことだった。頑張りたいと思っているのに引いてしまって一歩踏み出せない、きっかけをもらって挑戦してみたが全力を出し切れなかった。(中略)一回目のキャンプは楽しすぎたのに、今回はなんでこんなに苦しいんだろうって思って、このまま楽しめないでキャンプが終わってしまったらどうしようって不安でいっぱいだった。一人でぐるぐる考えるようになった。怖くて苦しくて辛くて自分が情けなくて、でも頑張りたいって気持ちもあって、ぐちゃぐちゃになって自分でもよく分からなくなっていた。そんな時に、悔しいなら後悔じゃなくて反省にしろと言われた。スリランカの時のNよりも確実に前進していると認めてくれた人がいた。／(中略)悩んでいたことを色んな人に相談するうちに、ここでならやってみても大丈夫かなって思えたり、頑張っているみんなに負けたくないって思った。勇気を出して飛び込んでみたら、みんなが温かい目で見てくれて、すごく安心した。やって良かったと心の底から思えたり、楽しいと思えた。たくさんの人から自分を肯定的にとらえてもらえて、背中を押されて、愛をもらったと思う。私が挑戦したことで、頑張ろうって思えたりと言ってくれた人もいて、勇気出してよかったと思った。でも今回はたくさんの人にきっかけをもらって動いていたので、今後は自分で動けるようになりたいと思ったし、今回みんなにしてもらったように、誰かの背中を押せる人になりたいと思った。(静岡キャンプ事後作文)

インターンとして臨んだ2回目のキャンプで、Nは人前に立つことに挑戦する機会を与えられた。事前に「人前に立つ」ということを目標にしていたことを知っていたスタッフと先輩インターンが、朝の体操を任せただ。苦手なことへの挑戦はうまくいかず、Nは小さな声しか出すことができなかった。Nは引率スタッフにフィードバックを求め、スタッフのMは彼女の課題である「全力を出しきれない、引っ込んでしまう」部分に対して再度挑戦の場を与えた。ここにグッドのユニークネスがあるといえよう。スタッフは関与のポイントとして、成果が出たか、技術が上がったか、という観点を重視している訳ではない。当人にとっての最高到達点に照らした際に、「出し惜しみせず、思い切って行動できているか」「周囲の人たちにベクトルを向け、思いを持って関わり、行動に移せているか」といった、内心・性格に関わる人間的側面を重視して細やかにフィードバックをし、成長を促す。こうした関わりがNに対して自身の可能性・伸び代を認識させ、次なる挑戦へと後押しするようになる。他のスタッフや参加者にも話を聞いてもらったNは2回目の体操に挑戦し、「勇気を出してよかった」と思うに至った。「変わりたい」という気持ちに対して挑戦する機会を作り、伴走しながら背中を押す関わりは、ワークキャンプにおいても、事務所での関わりにおいても、グッドが重視している大切なポイントである。

3-3-5. イベント企画担当（より親密な関係構築と課題の認識）

その後Nは、インターンとして地域の盆踊りへの出店企画に携わる。彼女にとっては、よく知らない相手と会議を重ね、コミュニケーションを取る機会となった。インタビューと、2019年に参加したモンゴルキャンプ事前作文にて次のように述べている。

Y：盆踊りの企画はどうだった？

N：当日までの準備期間で、分からないことを分からないって言えなかったのが反省。分

からないまま話がどんどん進んでいっている。(中略)リアクションしてるつもりだったけど、出てなくて、困らせた。

Y: A (先輩インターン) に言われた?

N: Aと、R (スタッフ) にも言われた。「もうちょっとリアクションとらないとみんなやりにくいよ」って。それを聞いてたAにも「本当だよ」って言われて。「表情も声も、うなずきも全部、自分から発信しないと分からないよ」って言われた。

Y: それ言われてどう思った?

N: そうだなんて思ったし、自分ではやっているつもりだったけど、つもりだったんだなって。(インタビュー)

自分の感情をもっと出すようにしたいです。話し合いの中で自分では普通に聞いていたつもりが、もうちょっと反応が欲しいと何度も言われてしまいました。自分が思っている自分と周りが見て思っている自分は違うのだと分かりました。(モンゴルキャンプ事前作文)

インターンとしてイベントを企画する体験を通して、Nは自分のリアクション (表情・言葉での反応) が小さく、周囲に考えや感情が伝わっていなかったこと、自己認知と他者の認識が一致していないことに気づいた。これまでの学校生活では「物静かな子」というだけで片付けられていた性格にフィードバックを受けたことにより、Nは自身のコミュニケーションの取り方を変化させる必要性を自覚することになった。グッドではこのようなフィードバックのことを、「ツッコみ」と呼んでいる。「当たり障りのない人間関係においては言わなくてもいいが、本人のためには言った方が良いこと」を言動に基づいて、時にユーモアを交えながら本人に伝えることを言う。中長期で関わりを持ちながら一つのことに取り組み、言いづらいことを言っても問題のない信頼関係が形成されるからこそ、このような「ツッコみ」が成立するのではないだろうか。定期的にグッドに通い、より親密な人間関係が構築される中で、Nが自身の課題に気づき、「なんとかしたい」と思い始める契機となった出来事であった。

3-3-6. 4回目のキャンプ (試行錯誤の経験と自信の形成)

プログラムへの参加を重ね、周囲への目配りや気配りを意識し始めたNは、さらなる目標を持って4回目のキャンプに参加した。2019年に参加した広島キャンプ事後作文にて次のように述べている。

K (インターンOB) と話したときに、ちょっと前の自分のことを思い出しました。あの時はみんなの輪に入るのが苦手で、端の席でただ笑ってみんなの話を聞いているだけでした。でも今回のキャンプはそうじゃなかったって気づけました。本当にちょっとずつだけど、進めているなって思いました。でもこれからはもっと自分から、もっと楽しんで動けるようになりたいと思います。／キャンパーの一人一人ともたくさん話せて、みんなとしっかり関わられたのがうれしかったです。今回4回目のキャンプだけれど、1回目と2回目参加した後、事務所や報告会やその他でもみんなと集まる機会はたくさんあったけれ

ど、そこでうまく輪に入っていけない自分がすごく嫌でした。どうしたらいいんだろうって考えた時、一人一人ともっと丁寧に関わろうって思いました。だからモンゴルと広島では全員と話すことを頑張りました。キャンプが終わった今、全員が大切な、大好きな人になったなと思います。自分から動いてよかったです。自分から動いたらもっと楽しくなるよって言われたけれど、本当にその通りだなんて思います。

事務所での活動と2年次夏期休暇におけるモンゴル・広島ワークキャンプでの経験を経て、Nは試行錯誤して人と関わる中で、苦手な「人と話すこと」に挑戦し続けた。このキャンプの前には、フリースペースにおいて、周囲と話すことができず静かに黙っていたNを見て、スタッフRが「せっかく人が好きで、人と関わりを持ちたくてグッドに来ているのだから、周りの人に興味を持って話しかけてみないと」とアドバイスしたこともあった。Nは悔しさを感じながら、人と出会い話す場を得ようと、何度もキャンプに参加したりフリースペースに通い続けたりしていた。初回キャンプの時は人と話すことや友人を作ることに関心、半ば諦めていたNであったが、半年のうちに、自分から参加者全員に関わってこうという意識が持てるようになった。そしてそれは義務感ではなく、「人と話すことが楽しい」という手応えを得られたからこその変化であった。本人が自信を失っている際にも、周囲のスタッフや参加者が、できたことに目を向けるよう伝え続けてきたことで、Nは自身の変化に自覚的になり、自信を持てるようになっていった。

3-3-7. 後輩のサポート経験（立場の変化を意識する）

4年生となった2021年4月以降、Nの意識は後輩を育てることに向いていく。2年生のインターンのサポートを務めたオンラインイベントについて、2021年9月に参加したきっかけキャンプ事前作文にてこのように振り返っている。

オンラインイベントに関しては、初めて2年生の二人にメインで進めてもらうことになっていたのですが、二人がいい顔してゴールまで走り切るためには自分に何ができるのかを考えていました。思い返せば、今までやらせてもらった盆踊り、ハロウィン、去年のオンラインイベントは、前に出て挑戦する機会を与えてもらってどうやったら私が色んなことを学べるか、やってよかったと思ってもらえるかを上の代の人たちが考えてくれていた気がします。それを今回は自分がやる番だなんて思って臨みました。気合入れてスタートしたけれど、準備中は余裕がなくてイライラしてしまったり、一緒にやっている3人とうまくコミュニケーションがとれなかったり、ぐるぐるしている2年二人の背中を押すのが難しかったり、悩む部分がたくさんありました。

Nは最終学年となり、後輩インターンのサポート役に回ることを経験した。自身が人前に立って、苦手なことを乗り越えて自信を持てたことを思い返しながらか、後輩にも同様に、良い経験をしてほしいと願って関わりを持ってみたものの、思いを伝えたり後輩をやる気にさせたりすることの難しさを痛感した。同時にそれは自分がかつて周りにどのように接してもらったかを思い出し、人を育てる関わりをするためには相当なエネルギーがいるということを認識する機会にもなった。誰かに言われたからではなく、立場が変わり、これ

までの視野視点が転換して、「後輩を育てる」ことを意識するようになっていく。グッドというコミュニティの中で、「してもらったことを他の誰かに返していく」という慣習が生まれていることがわかる。そして、学生時代の終わりを意識するに従って、Nのモチベーションもより高まっていく様子が見て取れた。

3-3-8. 学生時代最後のキャンプ（思いを持って人に関わる）

卒業を間近に控えたNは、学生生活最後に参加した。2022年3月きっかけキャンプ事後作文にて次のように記述している。

それが正解かどうかじゃなくて、自分がその人のために伝えられると思うことを一生懸命伝えようと思って臨みました。(中略) 色々な人と話して、自分なりの想いをちゃんと伝えられたことは一つよかったと思います。(中略) 自分からやったことないことに飛び込んで行ってほしい、段々人に気持ち向き始めたから、もっと自分から話しかけてほしい、自分の思いは目の前の人にちゃんと届けられるようになってほしい、自分が在りたい方向にどうしたら進めるのかを前向きに考えられる人になってほしいなど、沢山の「こうなってほしい」「こうなったらもっと面白い」が出てきました。(中略) これからのみんなをまだまだ見ていたいと強く思いました。／今までのキャンプで一番早く終わってしまいました。本当に一瞬でした。でもその中には思い切り遊んだこと、辛い辛い言ってご飯を食べたこと、ドキドキした表情で色々な話を聞かせてくれたこと、涙を流して悔しがりながらそれでも前をむこうとしていたこと、沢山のみんななどの幸せな時間が詰まっています。キャンプで感じた、みんなと一緒にいて楽しいと思える気持ちや、思い切りふざけることの面白さ、人を思うことが幸せだと思えることは、全部全部、グッドのスタッフさんやキャンプで出会った仲間から教えてもらったことです。その人たちへ、色々な感情を伝えてくれて、こうなりたいて姿をたくさん見せてくれて、ありがとうの気持ちでいっぱいです。4月からは関わり方は少し変わるかもしれないけれど、もっと色々なことを面白いて笑ってられる人になりたいし、人の気持ちを丁寧に想像できる人になりたいです。

この頃になるとNはキャンプ期間中を通して参加者をよく見るようになっており、他のインターンの相談に乗りながらプログラムを進めていた。「この人は人前に立って何かできると自信になると思う」「この人はあまり周りと話していないことが心配なので話を聞きたい」といったことを、スタッフに自ら共有し、相談するようになっていた。また、気になる参加者に積極的に声をかけ、話を聞き、関係を作っていくことが得意となっていた。その姿は大変頼もしく、周囲からの信頼も厚くなっていた。この時期の一番大きな変化は、自分の経験から「語る」「伝える」ことができるようになったことである。対峙する人の話に耳を傾け、共感するだけでなく、伝えたいことを言葉にする、ということができるようになっていった。初めてのキャンプでは表情も非常に乏しかったNであったが、3年後にはよく笑い、冗談を言い、人前で率先して発表や出し物ができるようになるまでに成長していた。

3-3-9. 学生時代を振り返って（Nにとってのグッド）

学生時代を振り返った時に自身にとってグッドがどのような場所であったかについて、インタビュー内で次のように述べている。

Y：最後に、グッドはどんな存在？

N：たくさんのお愛で支えてくれている場所だなと思う。

Y：どんなところからそう思う？

N：(スタッフに) 結構色んな事言われる。(中略) 言ってくれるのは本気で私のことを思ってくれているからだし、こうなったらもっといいと思うとか面白いっていうのがあるから。それってちゃんと見てくれているから。そんなことしなくていいのって世間一般の人は思うかもしれないけど、本気で自分のことを思って伝えてくれるのは愛だになって思うし、自分もそれにめっちゃくちゃ支えられて生きているなど思っている。

4. 終わりに

本稿では、Nのエピソードを元に、ユースワークによる参加者の意識変容・行動変容について取り上げた。Nの変容において最も重要なポイントは、「N自身も自覚していない可能性に気づかせること」すなわち、「本来は人が好きで、交流を楽しむことができるのだ、という自信を持たせること」と「他のコミュニティでは指摘されない部分に、本人の成長のために敢えて『ツッコみ』を入れること」すなわち「表情の乏しさを改善し、全力を出しきれず引っ込んでしまう部分を乗り越えられるよう伴走し、伝え続けること」にあったと言えよう。

加えて、非日常のキャンプだけでなく、事務所やイベントなどの日常の場に挑戦機会が数多くあり、その過程で、スタッフや先輩インターンらが相談に乗り、応援し続けていた。自分のできること・できないことを認識しながら課題に挑戦し続けた4年次には、後輩が増え、キャンプへの参加経験を重ねるうちに、かつて自分がそうしてもらったように、人を育てたり、安心させたり、自信を持たせたりする関わり方ができるようになった。

「一見なんの問題もない大学生」であったNに起こった変容は、些細なことのように見えるかもしれないが、本人と周囲にとっては大きな転換であった。肩の力が抜け穏やかに笑うNの笑顔は、以前のそれとはまるで違っている。他者に対して向き合う姿勢や自身の感情の変化など、内面的な変容は非常に大きく、そんなNの影響を受けた者やあこがれを抱く者も多い。人目を気にしてひっそりと生きていたNに起こった変容が、これからのNの人生を豊かにし続けていくことを願ってやまない。

【参考文献】

磯田浩司・仲山友, 2022, 『ユースワークにおける指導法の研究 ワークキャンプ参加者の意識変容に着目して』, 神奈川大学心理・教育研究論集。

田中治彦, 2015, 『ユースワーク・青少年教育の歴史』東洋館出版。